

人丸歌「歌意図」の転用

——『百人一首像讚抄』から『歌仙金玉抄』へ——

田野 慎 二

はじめに

「百人一首絵」には、作者の姿を描いた「歌仙絵」のほかに、和歌の意味を汲んで絵画化した「歌意図」がある。画帖では、「歌仙絵」の背景に「歌意図」を描いた「探幽齋図百人一首乾」や「百人一首画像探幽筆」などが知られている。かるたでは、上句の一枚に「歌仙絵」を、下句の一枚に「歌意図」を描いた「光琳かるた」などがある¹⁾。

版本では、『百人一首像讚抄』(以下、『像讚抄』と略す)が、「歌仙絵」「歌意図」という二種類の挿絵を付した最初のものである。延宝六(一七〇〇)年に刊行された大形本(大本)の挿絵は、菱川師宣の手になるもので、その後の「百人一首絵」に大きな影響を与えた。

稿者は、別稿において、この菱川師宣の「百人一首絵」が、「絵入基箭抄」を経由し、三十六歌仙の絵入注釈書である天和三(一六六三)年刊『歌仙金玉抄』に巧みに利用されている実態を具体的に考察した²⁾。その際には、『像讚抄』式子内親王歌「歌意図」転用の問題について、特に

詳しく検討した。本稿では、『像讚抄』柿本人丸歌「歌意図」の転用の問題に絞り、同じような「歌意図」が、別の歌に対してそれぞれ異なる意図で付されているのか、ということをも具体的に考察することを目的とする。

本稿では、別稿と同じく、延宝六年刊『像讚抄』(江戸・鱗形屋板行、野中春水氏蔵本³⁾)、天和三年刊『歌仙金玉抄』(京都・金屋半右衛門板行、東京都立中央図書館・特別文庫室蔵⁴⁾)を用いている。

一 『像讚抄』人丸歌「歌意図」

『百人一首像讚抄』の人丸歌と注釈部分は、次のとおりである。

あし曳の山どりの尾のしだりおのながくしよをひとりかもねむ

此哥は、別なる儀などは更になし。たゞ、「あし引の」とうち出だし、さるにより「山どりの尾のしだりおの」といひて、「ながくしよを」といへるさま、いかほども限りなき夜の長きなる、詞の続き妙にして、風情尤も長高し。…(以下、省略)…

(適宜、漢字を当て、濁点・句読点などを補った。以下同じ)
注釈(細川幽斎の注)では、夜の長さを導き出す上句の絶妙な詞統きが賞されている。この序詞部分については、「有心」「無心」の両説があるが、幽斎は、後者の立場で施注している。

当該人丸歌に対する「歌意図」が次の「図版1」である。

和歌の主旨は、独り寝の侘びしさを直叙した下句にある。この主旨に注目して「歌意図」を描くということもできたらう。しかし、師

宣は、敢えて、序詞部分の「山どり」をモチーフに、山中で寄り添う番いの山鳥を描いたのである。

【図版1】『像讚抄』人丸歌「歌意図」



歌「歌意図」に番いの山鳥が描かれていることに注目し、それらが「歌の意味を無視して描かれているようである」と指摘した。また、吉海直人氏も、

ただ、師宣の歌意図で面白いのは、歌意図が歌の意味を必ずしも的確にあらわしていないということだ。…(中略)…「ながなかし夜をひとりかもねむ」だったら、山鳥は1羽だけ描きなさいということになります。歌意図なんだけども怪しい。実は、この歌の歌意図は、多くの場合は山鳥は1羽しか描かれていないんです。だけど、師宣の絵は、よく見ると2羽いる。絵ではちっとも寂しくないということになります。

と述べている。名詞自体で単複の区別をしない日本語では、ままする問題である。表現上は、どちらの可能性もあって、享受者の判

断に委ねられる。

しかし、この場合は、和歌に「ひとりかもねむ」とあるのだから、独り寝の山鳥を描く方が常識的であろう。というよりも、この人丸歌の影響を受け、山鳥は、「音をぞ鳴く遠山鳥の独ねにながきへだての中の契は」(新拾遺集 恋四 前参議為実 二三七などと、独り寝を象徴する歌材として詠じられることが多い。

さらに、多くの注釈書で説かれていることであるが、山鳥には、「ひるはきてよるはわかる山どりの かげ見る時ぞねはなかれる」(新古今集 恋五 不知 二三三)と詠じられる、昼は一緒にいるが、夜は別れて寝るという習性があると思われる(『俊頼髓脳』奥義抄)。

このような和歌的伝統を踏まえると、一羽の山鳥を描いた「歌意図」は、和歌の主旨である独り寝の佇みしさを象徴する「歌意図」として描かれたものと言えよう。

それでは、師宣の「歌意図」は何を意味しているのだろうか。師宣の意図を次に考えてみたい。

二 番いの山鳥を描いた「歌意図」の意図

本節では、【図版1】の、番いの山鳥が描かれた「歌意図」の意図について検討する。

人丸歌の「歌意図」として、番いの山鳥を描く方法としては、時代は下るが、たとえば、安永十(一七九二年)『花陽百人一首大成』(西川祐信画)の、山や谷を隔てた雌雄の山鳥の姿を描くという手法もある。

しかし、【図版1】では、明らかに寄り添う番いの山鳥が描かれている。

山鳥の番いが寄り添っているから、この絵は、夜ではない、昼の山鳥の姿を描いたことになる。その点でも、「ながくしよ(夜)」とある和歌とはずれていることになるが、さらに、【図版1】の右奥に描かれた景物にも注目してみたい(【図版2】参照)。

ここに描かれているのは、遠山の桜である。参考までに、『像讚抄』のなかから、山の桜を描いた「歌意图」を、【図版3】に掲げた(他に、前中納言匡房歌^三)も該当)。

【図版2】 【図版1】の右奥拡大図



と比較してみたい。

『像讚抄』の伝本は、上方版小形本と江戸版大形本とに大別され、現存伝本では、小形本が大形本に先行する^四。ただし、小形本の挿絵は、大形本の菱川師宣の挿絵とは、随分と異なっている。

小形本の挿絵については、

- ① 師宣が最初に描いた「百人一首絵」。
- ② 師宣の門下生の手になるもの。
- ③ 上方の絵師の手になるもので、師宣が、その絵を参考にして

大形本の挿絵を描いた。

といった見解が示されている^五。小形本の挿絵は、大形本の挿絵とは全く無関係のものではなく、影響関係を想定してもよいものである。

【図版3】 『像讚抄』大僧正行尊歌^六「歌意图」

もろともにあわれと思へ山ざくら

花より外にしる人もなし



小形本『像讚抄』の人丸歌「歌意图」を、【図版4】に掲げた。

寄り添う番いの山鳥が描かれている点は同じであるが、図右に描かれているのは、桜ではなく、紅葉と松である。この図の紅葉が、「夜長の季節を暗示するために描き加えられたものである点に注目したのは、前引のモストウ氏^六である」。

小形本の「歌意图」では、秋が暗示されているのに対して、大形本

の「歌意図」では、春が暗示されていることになり、これは、師宣の意図的な改変とみることができるとはではないか。

【図版4】 小形本『像讚抄』人丸歌「歌意図」



大形本『像讚抄』のよ
うな「歌意図」を描いた師
宣の意図は、どこにある
のだろうか。

田中宗作氏は、「江戸
初期にあらわれた古典注
釈の絵入板本は、古典の
啓蒙という点で意義深い

ものがあると思う」と述べている。読者のなかには、「尾の長い山鳥
とはこんな姿なのか」というほどのことが分かれればそれで済む読者も
いたと思われる。しかし、もっと知的な読者も少なからずいたであ
ろう。【図版1】の「歌意図」には、知的な読者の欲求にも応えられる
ような、絵師の工夫が込められていると考えられまいか。

『像讚抄』の「歌意図」に注目して、絵師のさまざまな工夫を整理
した加藤次直氏は、

以上見てきたように大本と小本の相違点は小本には啓蒙的な要素が
強く、わかりにくいものを絵によって説明し、理解させようとする意
図が読み取れる。それに対し、大本ではそうした啓蒙的な要素を捨て、
どちらかというところの歌のイメージを絵によって追体験できるように絵に

改めている。……

と論じている。人丸歌「歌意図」の場合、「追体験」する絵とは言えな
いが、読者に、春の、のどやかな日中に、寄り添う番いの山鳥の姿
を想像させることで、独り寝の寂しさをより一層切実に感じさせる
というような効果を、師宣は狙っていたのではないだろうか。この
ような絵師の工夫をどの程度あぶり出せるかが、今後の課題とな
う。

さて、大形本『像讚抄』人丸歌「歌意図」は、「絵入基箭抄」を介し
て「歌仙金玉抄」家持歌に転用された。次に、家持歌「歌意図」の意
図を検討する。

三 『歌仙金玉抄』家持歌「歌意図」の意図

『歌仙金玉抄』は、三十六歌仙の絵入注釈書である。著者の山雲
子(坂内直頼)や伝本などの詳細は別稿に譲る。天和三年刊『歌仙金
玉抄』の家持歌と注釈部分は、次のとおりである。

春の野にあさるきよすの妻戀に、をのがかりかをそこ知れつゝ

…(前略)…
りする雉子のをのがかり所を人にしらるべきやうはなけれども、
妻を戀する故に声をたてゝをのれと人に知られて命を滅ぼすな
り。こゝの人といふは、狐師とみるべし。又は、たゞ人ともみる
なり。雉子の声を聞ては、其まゝとらんとしたくする也。然は、
我とや先にかゝるなり。はかなき鳥類だにかくのごとし。況や人

は慎むべしと戒めたる也。一心これに溺れぬれば名を流し身を滅ぼす事を鳥に喩へたり。(以下、省略)

注釈では、家持歌を、愛執を戒めるための教訓的な歌として捉え、妻を恋しく思う故に、鳴き声を人に聞かれて命を落としてしまおうという解釈が示されている。

この家持歌に対する「歌意図」が次の【図版5】である。

【図版1】と比較すると、ほぼ同じ図で、大きく異なるのは、尾の短い雌鳥の方が消去されている点である。

雉も山鳥も共にキジ科の鳥であり、似た姿で描かれる。

【図版5】 『歌仙金玉抄』家持歌「歌意図」



参考までに、寛文六(一六六五)年『訓蒙図彙』のなかから、山鳥・雉の図像を、【図版6】に掲げた。姿の似た山鳥を雉像として転用しているのである。

【図版5】では、場所が

山のみで、その点は、春野の光景を詠じた家持歌とずれている。『歌仙金玉抄』の挿絵は、『像讚抄』、直接的には、『絵入基箭抄』の挿絵を最大限生かす形で利用するという原則があるために生じたずれである。しかし、【図版5】は、【図版1】の人丸歌「歌意図」が、春の日

中の光景を描いたものであることを逆に示していると言えよう。

【図版6】 『訓蒙図彙』山鳥(山鶏・雉野鶏)



【図版5】の雄の雉のみを描いた「歌意図」は、和歌と注釈の主意に添い、妻を求めて鳴く雉の姿を焦点化したものである。

この「歌意図」を、同じ家持歌に対する別の「歌意

図」と比較してみる。天和三年刊とは別系統の松会版『歌仙金玉抄』や、北村季吟の正徳四(一七四)年刊『歌仙拾穂抄』などの「歌意図」では、番いの雉が描かれている。後者の「歌意図」を【図版7】に掲げた。天和三年版の特徴でもある雌を描かない構図は、鳴きながら妻恋する雄雉の愛執に囚われたさまをより強調するために、意図して絵師が描いたものと言えようか。

【図版7】 『歌仙拾穂抄』家持歌「歌意図」



おわりに

以上、本稿では、菱川師宣が描いた『像讚抄』人丸歌「歌意図」の意図を考察し、その「歌意図」が、天和三年刊『歌仙金玉抄』家持歌「歌意図」に転用され

ている点(直接は「絵入基箭抄」に拠る)に注目し、「歌意図」の意図と転用の実態を具体的に考察した。他の「歌意図」の転用についても、興味深い事例が少なくないので、改めて論じたいと思う。

[注]

- (1) 森暢『百人一首絵』(歌仙絵・百人一首絵)角川書店 昭56。
- (2) 拙稿『歌仙金玉抄』の挿絵——『百人一首絵利用の実態』(『広島国際大学医療福祉学科紀要』第3号 平19・3)参照。
- (3) 版本文庫9『百人一首像讚抄』上・中・下(国書刊行会 昭50)に拠る。
- (4) 『江戸時代女性文庫90』(大空社 平10、解題・吉海直人)に拠る。
- (5) 諸説の整理は、吉海直人『百人一首の新考察 定家の撰歌意識を探る』(世界思想社 平5)を参照した。
- (6) 注(7)掲出、モストウ氏著書151頁に引用された、文化元(688)年補刻刊『冠玉百人一首水精箱』の「歌意図」がそれに該当する。また、『像讚抄』では、人丸歌を踏まえて詠まれた、良経歌(二)「歌意図」が独り寝の男性を描く。
- (7) 「In terms of the Poem's pictorialization, the Zosansho figure is fairly straightforward [3-1]. Both it and the Kyoto artist [3-2] seem to disregard the sense of the poem by having both a male and female pheasant — no doubt influenced by the convention of bird-and-flower paintings (kachoga) popular at the time (though the Hyakushu Hinagata uses only the male pheasant).」(OSH S. MOSTOW 『PICTURES OF THE HEART The Hyakushu Isshu in Word and Image』 1996 University of Hawaii Press)。
- [3-1]が『像讚抄』大形本、[3-2]が『像讚抄』小形本を指す。訳は稿者の試訳である。
- (8) 基調講演「百人一首の享受史——絵画の世界——」(『関西文化研究』3

平17・11

- (9) 柴田武『古池や』の蛙は何匹か(『図書』612 平12・4)参照。
 - (10) 古いところでは、『吉田本古注』『頼経問書』などに見える。
 - (11) 伝本については、田中宗作『百人一首古注の絵入板本について——像讚抄と基箭抄(増補像讚抄)とを対象として——』(『百人一首古注釈の研究』桜楓社 昭41)、吉田幸一『百人一首 為家本・尊円親王本考』(笠間書院 平11)に詳しい。
 - (12) ①②は、注(11)掲出吉田氏著書参照。③は、加藤次直『挿絵から「読む」百人一首——『百人一首像讚抄』の挿絵の論理と意味——』(『総合教育センター紀要(東海大学)』25、平17・3)参照。
 - (13) 注(7)掲出書。「The Kyoto artist adds autumn leaves to indicate the season with the longest nights of the year. … (以下略)…」。
 - (14) 注(7)掲出書151頁。
 - (15) 注(11)掲出、田中氏論考参照。
 - (16) 注(12)掲出、加藤氏論考参照。
 - (17) 赤木文庫(横山重氏)所蔵本、近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従 参考文献編4 訓蒙図彙』(勉誠社 昭51)に拠る。
 - (18) 北村季吟古註釋集成別6『歌仙拾穂抄いわ(二)』(新典社 昭55)に拠る。
- [参考文献] 吉海直人編、日本書誌学大系75『百人一首年表』(青裳堂書店 平9)、同氏編著『百人一首注釈叢刊1『百人一首注釈書略解題』(和泉書院 平11)、新藤協三『三十六歌仙叢考』(新典社 平16)。
- [付記] 本年度、国文学研究資料館 基幹研究(A)「王朝文学の流布と継承」に加えていただいた。本稿は、その趣旨に添う課題を一部まとめたものである。
- たの・しんじ、広島国際大学医療福祉学部助教 ——